
僕達のIS 《インフィニット・ストラトス》

五月雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕達のIS 《インフィニット・ストラトス》

【Nコード】

N4012W

【作者名】

五月雨

【あらすじ】

織斑姉弟は実は三姉弟だった。そして一番下の弟は転生者。

篠ノ之束と共に室内にこもりっぱなしの不健康な生活をする彼はさまざまな苦難にぶつかる。そんな彼の心身の成長していく様を描いた物語。

作者が何気なく書き始めたものです。他のものより悪いと思います
が、読んでいただけると幸いです。

プロローグ（前書き）

はじめましての方、はじめまして。

お久しぶりですの方、お久しぶりです。

『武器と魔法と技術と知識は使いよう』（ゼロの使い魔の二次です）をさばらずにさっさと書けという方、同時に短いかもしれませんを更新しました。

プロローグ

何処ですかここは？

何故に僕はきれいな泉にいるんですか？

夢ですよね、そうじゃなきゃあり得ません。こんなところに僕が来ることなんてないですし・・・

「違うぞい。現実じゃ」

誰ですかまったく。人の心を読むなんて暴挙を行う変態は・・・
・って今なんて言いました？・・・現実？・・・嫌です
すね、こんな場所に来る予定はまったくありませんでしたよ。だいたいなんでこんなところに僕は来たんですか？

「お主が死んだからじゃ」

Why? What? この人大丈夫なんですか？頭が逝っちゃってるんじゃないですか？死んでいるなら天国か地獄ですよね。Let's go to 精神科ですよ。あ、それよりも脳を移植してもらったほうがいいと思いますね、ここまで来ると。

「失礼な奴じやのう。まあよい。まだ子供の神がお主を殺してしまつてのう、本来死ぬはずのないお主が死んでしまったのじゃ。だからお主をお詫びに転生させてやろうと思つてのう、あくまで転生じやよ。憑依ではないのじゃ。ここ重要じゃぞ。ということで転生先ね。世界をゼロの使い魔以外で選ぶのじゃ」

「・・・もう何もいう気はしません。本当に僕は死んだんですか？」

「疑り深い奴じやのう。ほれ」

自称神様からオレンジ色の光の玉が放たれ、体の中に入り死んだと

きの映像を見せた。

そんな………神が食べ掛けのどん汁の具のこんにやくを落として、それが頭に当たって死亡だなんて………
酷すぎる。

「という訳じゃ。すまんのう」
なんとか理解しました。とっても酷いです。

「ゼロの使い魔以外で選ぶのじゃ。僕は既に1人ゼロの使い魔の世界に転生させたからの、同じ世界に同じ神が複数の転生者を送れないのじゃ」

成る程、では、どこにしましょうか………生徒会系は生徒会メンバーは固定だから介入出来ませんね、却下。………俺妹、あの世界難しくないですか………とある系、とりあえず却下………百花繚乱、絶対楽しめる世界でしょうね、とりあえず保留………デュラ、臨也が面倒ですね………IS、そうですね、ISにしましょう。

「ISで、いいのじゃな。能力をどうするのじゃ？」

能力ですか、そうですね、メカニックに関して束さん級にしてください。

「後はどうするのじゃ？」

え？まだいいんですか？

「後9個良いぞ」

そんなに………じゃあ原作開始時、力はデユラララ！の平和島静雄、足の速さを50メートル六秒、それ以外を無双遠呂の源義経の身体能力にしてください。それと、とある魔術の結票さんの座標移動をください。

「ふむ、あと7個じゃ」

いえ、もうけっこうです。

「なんじゃ、もういいのか。じゃあ容姿をどうするのかを決めるかの」

容姿？別にどうでもいいですよ。余程悪いものでなければ。

「そうか、まあよいじゃろう。儂が勝手に決めるぞい。では楽しんで来るのじゃぞ」

ええ、でもその前に質問が……

「っと、危なかったの、下界に送りかけたわい。で、なんじゃ？」

ISの世界ってボカロとかありますか？

「……ないぞい。お主の世界の歌手の曲も大半がないぞい。だかの、アニメや小説、漫画の類はお主の世界の物がある。IS以外のメディアファクトリー文庫限定じゃがな」

本当ですか！それはラッキーです。

「オタクのお主がボカロとアニメのいいことを喜ぶとわのう」
神様、楽器を弾けるようにしてください。それと、歌を上手く歌えるように。

「何がやりたいか分かった気がするのじゃが……音楽のセンスをあげる、残り六個もあまりがあるのじゃが」
いえ、あとはけっこうです。

「そうか、では今度こそ、楽しんで来るのじゃええ、行ってきます。」

足元に穴が開き、そこから、ISの世界へと旅立った。

ちよつとだけ能力を強化しておいてやるうかの……
……
……容姿も良いものにしてやるうかの。

プロローグ（後書き）

最後まで読んでくれた方、ありがとうございます。これからもよろしく願います。

第一話 知らない天井だ（前書き）

一日2話連続更新です。ではどうぞ。

第一話 知らない天井だ

ツ痛・・・頭が痛い・・・ここは・・・どこですか？

目を開けた先は・・・知らない天井だ・・・

ブンッ

そんな音と共に視界の中に先ほどの神が現れる。

「さて、お主は今6歳じゃ。他の神に聞いたらな、小さい赤子のころに転生させたらボコられたと、言っておったのでな、じゃから六歳からスタートじゃ。あくまで原作に限りなく近い世界じゃ。原作が崩壊しても構わんぞ。それと一つ教えておく。これまでの記憶が無いお主は記憶喪失ということにしておいた方がよいぞ。こっちの世界への転生時に車にひかれるという事故に合わせたからのう。ついでにここは病院じゃ」

さいですか、車にひかれるなんてひどいことを・・・まあ分かりました。二度目の人生を楽しみますね。それと、とりあえず記憶喪失という形にしておきます。

「そうじゃな、お、そろそろ人が来るな、ワシは戻るでな、さらばじゃ」

ブンッ

今度はそんな音と共に姿を神は消した。

「蓮、気が付いたか！」

病室に一人の女の子？が飛び込んでくる、そして、それに続いて一人の女の子も入って来た。

「大丈夫か？」

誰？who are you？

「え・・・とすいません。誰ですか？病室、間違えていませんか？」
思わず僕の口からはそんな言葉が放たれ、先に入って来た少女が

えっ』という表情をした後、失神した。

「ちよつ、大丈夫ですか!？」

ロビーにて

「機械に反応があつた。目が覚めたようだよ、行ってきたらどうだい。千冬ちゃん、一夏君」

猫を助けようとしてトラックにひかれた蓮を治療した腕のいい医者の人（カエル顔ではない）が、蓮が起きたことを教えてくれた。久々に蓮と話せる。まったく、心配をかけさせるやつだ。

「行かせてもらいます。行くぞ一夏」

「はい千冬姉」

蓮の病室は………

「いいんですか先生、記憶を失っている可能性を言わなくて」

「言ったらどうなる。あの子たちなら彼の顔を見る前に失神してしまつかもしれない。せめて目が覚めてすぐの彼の顔を見たほうがいいだろうからな」

「そうですか……でも」

先生達が何かを話している気がしたがしつかりは聞こえなかった。とりあえず蓮に会いに行こう。こんなに体が軽いのは久しぶりだ。

病室のドアを開けると、蓮がベッドの上に座っている。

「蓮、気が付いたか」

目の前の状態から、起きているのが分かっているが思わず聞いてしまった。

「大丈夫？」

一夏も部屋に入ってきて、思わずといった様子で聞いてしまっていたそして、一瞬だけ蓮が困った表情をして……

「え……とすいません。誰ですか？病室、間違えてませんか？」

え……蓮が、私達が誰かわからない？記憶喪失？え、え……そんな……

その瞬間に世界が暗転した。

「ちよ……だ……じょ……で……」

蓮の声が聞こえた気がしたが何と言っているのか理解ができなかった。

「ちよつと、蓮、本気で言っているの！」

俺は思わず蓮に向ってどなってしまった。いつも家族思いで、どんな人に対してもやさしかった蓮が人を傷つけるような発言をするはずがない。でも今、千冬姉が傷つくようなことを真顔で言った。どうしても許せなかった。

でも、目の前の、ベッドに座っている蓮はどこか間の抜けた感じでさらに驚く言葉を発した。

「蓮って誰ですか？僕の名前ですか？」

どうやら本当に分かっていないようだった。

どうやら蓮つてのが僕の名前のようですね……で、この方々は誰なんでしょう。どこかで見たことのある気がするんですが……

・・・でもまあ、この様子じゃあこの方々がこの世界での家族ってことでしょうかね。

「僕の家族ですか？」

そう聞いたところ女の子が頭を抱えた。

病室の小さな窓から見える天気は雨だった。

この前病室に来た方々は原作組のメイン、織斑姉弟だったようです。原作と違って姉妹だったようですが・・・

「体はどうだ？おかしくないか？」

「大丈夫ですよ千冬姉さん」

「そうか」

病院を退院し、今日は千冬姉さんと、一夏姉さんと一緒に街に出てきました。ISは科学技術のアニメですがあの天災うさが動き出すまでは普通の世界と変わりはないですね。まだ女尊男卑の予兆すらないですし。

「ねえ蓮」

「はい、どうしました。一夏姉さん」

にしてもこの天気じゃ雨が降りそうですね。傘を持ってきておいて正解でした。

「その姉さんっての私に対してはやめてくれない？」

「？」

どうしたのでしょうか？たいして変わりがあるとは思えませんが。ちょっとさびしそうな顔をしているところが気になります。

「うつん、ちょっと。なんか壁があるように思えてさ。前はそんなの言わなかったしさ。千冬姉に対しては前は私と同じ呼びか「やめろ一夏」……ごめんなさい」

ああ、そういうことですか。それなら問題はなさそうですね。僕がこの世界に来るまでは元の蓮が千冬姉さんは千冬姉とか呼んでいて一夏姉さんに対してはただ一夏と呼んでいた。だから他人行儀に呼ばれているみたいで壁を感じる。だからとつとさびしいと言つてところでしょうか？双子の姉だからって呼び捨てでいいんですかね？にしても記憶を失う前のことを千冬姉さんは気にしているということですかね？

「あはは、いいですよ。そのぐらい気にはなりませんよ千冬姉。一夏、あんまり気にしないでください。頼みごとがあつたらすぐに言つてくださいね」

「あ、あ、あ……あり、がと」

「ええ、どういたしまして」

………なんで背筋が冷えるんですか………千冬姉？いや、まさかっ。振り返った先に居たのは視線だけで人を殺せそうな千冬姉でした。

第二話 僕は何

「……………なっ！」

「どうしたっ」

「大丈夫?!」

僕は思わずそこで固まってしまった。

……………ちよつと前のお話……………

「雨が降ってきちゃいましたね」

「そうだな」

「いつやむかなー」

街を歩いていたら突然雨が降り出してしまい、傘など持ってきていなかった僕は結構濡れてしまいました。どこかの店に入ればよかったのですが、周囲の店はレストランなど飲食店の類ばかり。昼食は先ほどとったばかりなので入るわけにもいきません。ということから少し濡れながら歩いている僕達です。

「あ、家具の量販店ですね、あそこなら入っても問題ないでしょうし入ってしましましょう」

「まったく、まあ他に入るところもない。そこでいいだろう」

「ナイス蓮」

家具の量販店に入った僕は気になったものをいじっては次の面白そうなものを探し、気になったものをいじり、また探す。ということを探り返していました。そして視界の隅に鏡が映った。

そういえばこの世界の僕ってどんな容姿なんでしょう。あんま変なのだったらいやですね。まあ確認してればいいことですし。という感じで鏡に近づき、覗き込んだ。そして、そこに映ったのは『金髪蒼眼』の少年。．．．おかしいですね、この鏡は本人と違う姿を映すのでしょうか。僕は日本人ですよ。普通に黒髪で茶色だか黒だか分かりにくい眼を持った子供が映るはずですよ。それなのになんで『金髪蒼眼』!? ．．．しかもどつかで見ただことのある気がする顔! そう、えっと、あれだあれ、vocaloidの『鏡音レン』．．．? ? ? レ．．．? ? ? ああ、あの神様やつてくれましたね。

織斑蓮「orimurararenrenrenレンレン鏡音レン

マジですか．．．日本人なのにこれは痛いです。こんな容姿はなんかのアニメの類の主人公クラスじゃなきゃありませんよ。

というか本当に僕は日本人? そして今頃になって僕の口は開き、

「．．．．．なっ!」

まともな言葉を発しておらず、

「どうしたっ」

「大丈夫?!」

千冬姉と一夏に心配された。

あのあと、固まっていた理由を千冬姉に言っただころ僕が何故こうなのかの原因? を教えてくれた。

いまいち細かいことまでは分からないが、原因不明の病気、頭髪・

眼色異常病？なんかこれまでに事例のない病気だとか。遺伝子に異常はなく、別に金髪系の遺伝子があるわけでもないので本格的に意味が分からないと医者もあきらめたとか……。大丈夫です、意味が分かるはずがありません。絶対あの神様の悪戯ですから。

でも、とりあえず……。。

「この眼の色とかどうにかありませんか？」

「カラーコンタクトでも買う（か）？」

「とりあえずその方向でお願いします。それと髪もどうにかなりませんか？」

カツラはいやだなカツラは……。。

「私の知人に頼んでおこう」

「東さん？東さんに頼むの？」

近い未来にISを作る人に僕の髪の色について相談することになるとは……。技術とコネの無駄遣いだ……。。

次の日、織斑家には日本人特有の眼と、黒い髪を持った少年と、奇抜なファッションをした少女、そして、触ればキレルような気配を放つ小さな少女がいた。

「れつくーん、その染料はお気に召したかな？」

「ええ、洗えば簡単に落ちると言うところが得に、それに髪にダメージを与えないってのも凄いですね」

いま机を挟んで僕の目の前には稀代の天才篠ノ之束がいます。こんな髪染めの染料を作るなんてすごいんですが……。。

なんか軽い感じな人で……。本当にこの人は天才？って感じです。

「うーん、まだ改良の余地はあるんだけどね、今のそれは髪を何度かこすると多分色が落ちちゃうと思うんだ。それに夏の時期のプー
ルや雨の日にぬれるとその黒色が落ちて下から金色が出てきちゃう
からね。だから完成版はシャンプーで落ちるようにしようと思うん
だよ」

「じゃあ、完成したらまたもらえますか？」

「構わないよ。今のも一年間は持つぐらいあるからあげるねー」

「ありがとうございます」

ここまで、一度ももう一人の少女、(篠ノ之箒と思われる)は眼を
閉じて腕を組んでいるだけでまったく喋りません。もしかして無口
なタイプ?と黙っていたら

「なあ蓮」

「は、はいっ!」

急に声をかけられました。右目だけを開けて……

「私の名前分かるか？」

「……………」

今なんて言いましたか? 『私の名前分かるか?』って言うということ
とは記憶が無いことに気付いた? 記憶が無くなったということは一
言も言っていないですし、ばれるような口ぶりをした覚えもありません。
一夏、気になって覗いていたのは気付いていました。そこで顔を
青くしたらばれますって。少しはポーカーフェイスを身につけま
しょうよ……………

「何ですか？」

「つべこべ言わずに答えろ」

「ひっ」

こ、怖いです、なんでこんな小さな子供が強烈な殺気を放てるん
ですか……………

「し、篠ノ之さん」

良かったです名字を聞いておいて。これで答えられなかったら恐ろ
しかった……………

「ふん、やつぱりな」

え、何がやつぱりな？何がやつぱりな、なにがなんなんですか・・・

「事故に遭う前、お前は私を箒と普通に呼んでいた。だが今は篠ノ之さんだ」

「ちよつと箒に怯えただけですよ」

とりあえずここは誤魔化しておかないと。いろんな人にこれまでの記憶がないことは知られるのは面倒なので。

「・・・事故に遭う前はこの程度の殺気でお前は怯えなかった。それに急に髪や眼の色が気になるなんてな。病院でその色のせいではない。つまり、お前には以前の記憶がなく、それで自分の持つ色が周囲の一夏や千冬さんと違った。それが気になり、千冬さんに相談し、千冬さんが姉さんに相談した。そんな感じの流れじゃないのか？それに姉さんは知っていたんだらう。病院のシステムにハッキングをしかけるなんなりして」

「・・・どこのシャーロック・ホームズですか箒は・・・わずかなこつちのボロで正確な流れを把握していますよ。僕が髪の色とかを変えたかった理由とかは違いますがね。束さんは推理を聞いてから何か生き生きしてますし。なんなんですかこの姉妹は・・・

「せーかいだよ箒ちゃん、相変わらず凄い推理力だね。みんなのらぶりい束さんもびつくりだよ。それにまさか束さんが知っていることにまで気づくとわね。さすがだよ」

「たまたま蓮と姉さんがボロを出したからですよ」
いや、普通はそこまで推理できないですよ。だいたい話をそんな感じに気にしながら聞く人もいませんから・・・

「これまでの姉さんだったら既に蓮に飛びついていたでしょうから・・・」

「・・・は？束さんのキャラが音を立てて崩壊しましたよ。」

あの飛びつきは千冬姉に対して限定だと思っていましたよ……
「そして飛びついた瞬間に意識を手刀に刈り取られていましたからね。記憶がない蓮にはそれができなく、そして後ろに倒れてしまい気絶すると思ったからしなかつたんでしょう？」

「そこでばれちゃったかー」

普通にこういう会話になっているのが恐ろしいです。下手すれば死んでしまうようなことを日常茶飯事で行っていたって言うことに驚きです。

「……まあ、とりあえずお二人がご存じのとおり僕には記憶がありません。何かと迷惑をかけると思うのでよろしくお願いします」

「その程度構わない（困った時はお互い様だからね）」
「ありがとうございます」

蓮はそう言つと机の上のコーヒーを口に含んだ。

IS インフィニットストラトス

どうも蓮です。今は小学4年生になりました。
え、飛ばし過ぎ？ガキの成長記録なんか読んで楽しいんですか？
まあとりあえず要点だけを書きましょう。

1・篠ノ之道場で最強？になりました。

2・東さんと一緒に学校サボってます。何しているか？一緒に例の物、ISを作っていますよ。

3・座標移動の能力を自由に使えるようになりました。

「東さんそれは……………」

「えーでもそれじゃあこっちの……………」

「だ・か・ら、そ・れ、を使うよりこっちの部品で補った方が……………」

「それじゃ近くの物しか排除できないよ。だったら遠くの物を……………」

「両方が中途半端になりますよ。それだったら片方に重点を置いたほうが……………」

「……お前らは（二人とも）学校に行け（行ってよ）……………」

「じゃあ、完璧な遠距離は捨てて近・中距離仕様にすればいいんじゃないかな。速力を高めれば何とかなるよ……………」

「その手がありましたか……………だったら音速を超えるぐらいに……………」

「体への負担を掛からないための防御を考えなくちゃね……………」

「……人の話を聞けええええ（聞いてよ）……………」

という毎日です。

「ところで東さん、テストパイロットはどうするんです。女性しか使えないんですしたら僕は使えまへんよ。東さんがやるんですか？」

「はっはっはー。やるのは東さんじゃないよ。ちーちゃんだよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

前世の記憶で分かっただけです。まさかマジでやらせる気だったんですか・・・

「何を驚いているのかな、このことを知っていて身体能力が高いのはちーちゃんか篝ちゃん、いっちゃんだけだよ。東さんには作る事ができても使うことはできない。篝ちゃんといっちゃんは体が小さくてとてもじゃないけど使えないよ」

「そりゃそーですけど・・・・・・・・・・」

「確かにちーちゃんには悪いと思うよ、でも、他に誰かいるの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

確かに他に代役をこなせる人がいない。千冬姉の身体能力があれば普通に、いや、対して使わなくても熟練の物が使うぐらいの能力を発揮する。そして、このISを知っている人は他に居ない。だから千冬姉に乗ってもらうのは・・・・・・・・なんかいやなんですよ・・・

「誰も好き好んでちーちゃんにやらせるわけじゃないよ。だけど他に誰かいるっていうの・・・・・・・・・・」

そう言った東さんの頬には一本の光筋ができていた。

・・・・・・・・・・そして、事件は起こった・・・・・・・・・・

「おい、何発が飛んでくる!?!」

「分かりません。ただ、この数は戦争時でもあり得ないぐらいと思われませう」

「つ、追加報告です。また新たに通達が入りました。ついにペンタゴンが落とされて、アメリカ軍の……来ます……」

「何だとおお！」

自衛隊の対策本部は荒れていた。

原因不明の世界同時ハッキング事故。世界各国の軍事コンピュータなどがハッキングされ、世界各国の発射可能だったミサイル全てが日本に向かって飛んできている。日本にある、ミサイルの迎撃が可能な戦艦などで防ぎきれぬ数ではなく、日本本土にそれらが襲来するのは必至だった。

「政府要人のシエルターへの移動は完了したか？」

「は、それらは終わりました。次は国民への公表です」

「仕方があるまい。防ぎきれぬことを隠すな。伝える」

「はい」

「いったいどこのどいつだ。日本に恨みでもあるのか……」
とある自衛隊高官は血が出るほど唇を噛みしめた。

「いくらなんでもこの数は……10000つてなに、厳しすぎる。しかも原作と変わってるし……ここは減らさなきゃまずいですよ。さて、撃ち落としますよ」

とある少年は眼の前にあるコンピュータの鍵盤に手をつけ、それはなめらかなリズムを奏でる。

「うわ、ひどいなー束さんが頑張ってこんなに奪い取ったのに、一瞬で奪い返してくれるよ。それに、なんか変なもの奪ってる・・・」
「・・・何で無人戦闘機なんか・・・まあいいや、奪い返させること前提で奪いまわってたしね。まったく、れつくんは私以上の天才かもね・・・」

「司令！」

「どうした、早く言え。今は広報部が会見中だぞ。そっちの関係か？」

「いえ、良い報告です」

「何があつた？」

「いままで奪われていたミサイルですが、次々と奪い返されていつています。ペンタゴンは侵入から28.9秒で奪い返され、ミサイルは発射を中止されました」

「凄いな、どこの国籍だ」

「いえ、それが・・・また別のハッカーです」

「・・・ハッカーのレベルはどこまで高いんだこの世の中・・・」

「分かりませんが、ですがかわりに無人戦闘機を多数奪われた模様です」

「もうどうとでもなれ」

「ついに高官は報告を聞き、自分が呆れているのか怒っているのか困っているのか分からなくなつた。」

「まったく東は無茶をさせる。蓮も東のプログラムを一瞬で打ち破るとは……将来が恐ろしいな」

口元に笑みを浮かべた白い光がとある山から飛び立った。

そのころ、日本周囲の海域では紅蓮の光が飛び交っていた。

制御が束から蓮へと移ったものが、束のままの物に当たり、爆ぜる。無人戦闘機が、機銃を煌めかせ、機銃が火を噴かなくなると、体当たりで、と次々にミサイルを撃ち落とす。そして、爆発に巻き込まれたものも爆発する、下の海面には、鉄の破片の豪雨が降り注いだ。

「よし、これでだいぶ落ちましたね。でも残り5000余り……さすがに数が多いですね、千冬姉でもいろいろ厳しい気がします。さて、もうひと頑張りしましょう」

白い閃光は海上の艦隊の上に現れ、手に持つ一振りの刀で飛来する鋼鉄の矢を斬り裂き、体でもって受け止め、無傷で姿を現した。そして、どう頑張っても追いつけないと判断した物に、まだ世界各地で実験中の荷電粒子砲を召喚して撃ちぬいた。

「司令！」

「今度は何なんだ……」

「白い騎士が……白い、中世のヨーロッパの鎧のような白い鎧を

身に付けた騎士が現れました。そして」

「はあ？もう意味がわからん。何なんだこの事件は……それに何だそしてって……」

「空を駆け刀でミサイルを斬り裂き、荷電粒子砲を召喚して撃ち、体でミサイルを受けてもダメージは全く見られません」

「……荷電粒子砲を召喚？荷電粒子砲なんて世界各国で今だにまともに使えるものなんかできていないじゃないか。それに召喚？現実を見る、二次元にハマりすぎだ」

「本当なんですって、映像出します」

「……んなバカな」

「千冬姉頑張りますね、もう約2000は落としてますよ……同じ時間かけた時になんで千冬姉のほうが落とせているんですか……僕みたいに広範囲に影響を与えている方が一ヶ所一ヶ所動くより落とせるはずなんですけど……」

「……ちーちゃんがここまでバグキャラだとは思わなかったよ。ただでさえれつくくんがバコスカとミサイル落としてるのに……織斑姉弟はバグキャラしかないのかな」

数日後、ISについての情報が開示され東さんは姿を消し、その後、筈はいなくなつた。

IS インフィニットストラトス(後書き)

ISはゼロの使い魔と違ってやりにくい。以上……

小学校

篠ノ之姉妹が消えたのと入れ替わりに、一人の少年が学校に姿を現すようになった。

一年生のころも何度か姿を見かけられたが、それ以外は学校で姿を見せたことがなく、サボリ魔などと、蔭では呼ばれていた。陰で呼ばれていた理由は簡単、一夏や、箒に聞かれるとフルボッコにされるから。

そして、その少年は箒が転校すると入れ違いに学校に通い出した。その少年は男子からは嫉妬のこもった眼で見られ、女子からは宝石を見るような眼で見られた。

「なんかみなさんの視線がいろんな意味で怖いですね」

「学校をいつもサボってるから暗い感じの奴とか、ふとった印象の悪い奴って思っていたら女の子みたいな可愛い男の娘だったからじゃない？」

「一夏、それは僕を誉めているの？それとも傷つけているの？」

「え、なんで？」

「もういいよ」

IS学園である意味無双を發揮する一夏の鈍感ぶりは酷いですね・・・

だいたい、なんで小学生なのに普通に男の娘とか出てくるんです？そんなもんなんですか？僕にはいまいまいち分からないです。

学校に来ているのにも一夏と二人きり。何かさみしい気が・・・
・プログラムでココロを作りましたよ、それで機械に組み込めばいいですね。何か装飾品を身につけるなりなんなりしてその中にココロを持った機械を入れて・・・

「ねえ、蓮、聞いてる？」

「あ、ごめんなさい。考え事をして聞いていませんでした」

「はあ、全く・・・だからね・・・」

えっと、腕時計は持って来ちゃだめですよ。ヘアピン・・・女装するのか僕は・・・？・・・ネックレス、これ身につけてるとどうなんでしょうか？まあ大丈夫でしょうね・・・

「ねえ、本当に聞いてる？」

「あ、聞いていませんでした・・・」

「はあ、今度はしつかり聞いてね、週末千冬姉も一緒に映画見に行くからね、蓮も一緒に行くよ」

「・・・さいですか・・・」

「嫌なの？」

「嫌じゃないですよ」

「じゃあいいでしょ、行くよ」

「はいはい、分かりましたよ」

映画ですか・・・久々に見ますね。何時以来でしょうか？多分前世以来でしょうね、これまでようもなく外に出るなんてことありませんでしたから・・・まあたまには気分転換もいいでしょう。あ、でも意志を持った機械を作るのは遅くなりますね、まあ数時間程度でしょう。その程度の誤差ならば問題はありませんね。

僕達が週末に見た映画は『トランスフォーマー』

これ見て僕は決めましたよ。『トランスフォーマー』を自分の手で作ってやります。

意志を持っていて、自分で行動し、戦える。最高じゃないですかっ！問題は変形ですね。変形させること自体はそこまで厳しくないでしょうけど車や戦闘機から人型のロボット・・・上手く形が合えばいいです。取りあえずラジコンを改造することから始めましょう。実験段階で本物の車やバイクを人型に変えるのは失敗したときに出費がかいですからね・・・

・・・やっぱり財力が無いですね。何をしてもお金は必要ですから。やっぱり例の計画を開始しますか。でもそれにはメンバーを集めなきゃいけませんしね・・・
とりあえず今はラジコンで作りましょう。確か2、3個ラジコンならあつたと思うんですけど。

パーツは一から作り直しが必要ですね。そうしなきゃ変形は不可能ですからね。エネルギー・・・ISのエネルギーを応用すればいいですね。そうすれば動力にも使用できますし、シールドを展開することもできます。それとこれで新しいシールド機能も開発しましょう。あの球状に展開するシールド、結構無駄が大きいんですよ。状態にはそこにシールドがなくとも影響が出ないところにも、シールドは展開されていますから。無駄に的を大きくしている原因の一つですね。

「蓮、お昼御飯置いておくね」

「ありがとう一夏」

うん、女の一夏も確かにいいです・・・けどあの男の鈍感一夏も最高に面白くてよかったですけどね・・・

『ふむ、ならば男に戻したおいてやるうかの』

あ、神様の声が聞こえた気がします。

一夏を男に戻しておくって・・・

大丈夫なんですかね？そうになると人の記憶もいじる必要もありますし、服、戸籍、写真などと記録というか一夏が女だったと分かるもの全てを変える必要がありますよ？

『大丈夫じゃ』

聞き間違えではなく、神の音がさっきも聴こえたようですね。ここまで来ると幻聴じゃなさそうです。

「よし、できた」

僕の前にはラジコンのGTRがある。とはいえ、普通のラジコンサイズとは言えないと思います。全長60cmあまりの大きさ。そして、そうこれが、世界で最初の『トランスフォーマー』。

変形し、意思を持つ。そして、戦闘も可能。武装は体内で自動生成が可能。そして、ISと同じ、コアはないものの、シールドを展開することが可能。これを、実際の車や戦闘機で行えばISと互角に戦える兵器となる。当然僕以外の人に使用させる気はありませんが・

・・・

「マスター、名前を付けてください。私にはまだ名前がありません」

「おつとごめんなさい。・・・ライン。ラインにしましょう」

「ではこれより私はラインと名乗りましょう」

「ええ、じゃあ僕からお願いがあります。敬語をやめてくれませんか？」

「何で・・・わかったよ、これでいいか？」

「ok、それでいいですよ」

そこで、僕の部屋のドアが壊れるぐらいの勢いで開けられた。

「蓮、できたか？」

入って来たのは見なれた顔ではなく、男の一夏？だった。

トランスフォーマー初号機である、ラインが完成し、学校に再び通

うになるのは小学五年生になってからでした。そして、始業式の日・

「うわあ、何これ」

「かっこいい」

「これ作ったの？」

「面白い」

「本当にロボット？」

「ラジコン？」

学校にラインを連れて行ったら大変なことになってしまいました。

もう珍獣扱いですよ。っと、僕とライン以外にもう一人珍獣扱いされている人がいます。

原作に登場した方ですよ。鳳鈴音さんです。中国から今年やって来たとか言うことで中国はどんな感じなのか？とかで珍獣扱いされています。

にしても困ったことが一つあるんですよ。女子の方々は僕達織斑兄弟を嫌ってはいませんが・・・男子の喧嘩とかで強いグループが僕達を嫌っているらしくて・・・どうしても必要なようがある時以外は声をかけてこないんですよ。男子が誰も近づかず、でも、女子は僕達に近づく。というか仲がいい。火に油を注いじゃっているみたいですよ。現に今、なんか変な男子に睨まれているんですよ。変な男子の理由？簡単ですよ。日本人のはずなのに銀髪なんですよ。そして赤眼。それにとってもイケメン。はじめて見た時はドイツの黒ウサギな部隊の隊長さんかと思っただんですが違うみたいです。ということから僕のいたった答え。

『他の転生者』

だよ。ということですよ。いやー普通に日本人なのにそんな髪の色染めるなり何なりしなきゃ無理じゃないですか。でもどうやら地毛みたいなんですよ。小さい頃の写真を見たら・・・銀髪でした。

転生者確定じゃね・・・

転生者だとばれるのは厄介ですから取りあえずの方針としては・・・

・無視。

なんか本格的にウザいんですよ。俺に出来ないことは他の人間にできるわけない理論？なんか自分ができなかつたことがあると取り巻きの人間にも不可能だと決めつけ、+他の関係のない人にも無理だと決めつける。すっごく厄介ですよ……

怪我

ここ最近は本当にいいですよ、いろんなことで。

例の変な銀髪少年が睨んでくるようなこともないですし。

全く何があつたのかは知りませんが、取りあえず誰かれ構わず挑発するのはやめたんでしょうか？

まあ、取りあえず平和に過ごせるのはいいことです。でも、今気になるのは……

「兄さん、何かいいことあつたんですか？」

学校から帰って来てからというもの、一夏兄さんが気持ち悪いぐらいにハイテンションです……

「ああ、蓮、最高だ」

……先ほどから幾度となく質問してもこれの繰り返し……全く意味が分かりませんよ……

「いい加減にしてください。本当に意味が分かりませんから」

脳が考えるということを忘れているんでしょうかね、こうなれば最終手段で、脳に直接電気ショックを……えーと、IS搭載用スタンガンはこつちにあつた気がするんですけど「すまなかつた蓮、ちゃんと答えるから、それだけは勘弁してくれ」……分かればいいですよ分かれば……

「えーと、つまり、鳳さんが料理屋で、今度御飯をおごってくれると……」

「おお、そうなんだ。本格中華だぞ、本場の味だぞ。蓮、興味わか

ないか？」

「……駄目だこのバカ兄……
・本気で気づいていそうにないですね。鳳さん、って言ったので分かりましたが、絶対に好意を寄せられていますよ。まあ、僕達とよくしゃべる女子は、みんな一夏兄さんにフラグを建てられた方でしょうが……」

「な、折角だから蓮も一緒に行こうぜ、今からさ」

「え、今日？急に？別に僕自身に問題があるわけじゃないですが……
……鳳さん、絶対に『兄さん』を呼んでいますよね。僕が付いて行ったら絶対に邪魔な気がするんですけど。どうなんでしょう？それに、ちよつと今日はやりたいこともあつたんですけどねえ。あんまり銀髪野郎が静かすぎて怪しいんですね……
「蓮、返事しねえと無理やりにも連れて行くぞ？」

そろそろヤツの行動を撮影できるようなカメラでも作らないとだめですね。伊達眼鏡でも作りましょうか、それにカメラでも内蔵させて、あ、でもラインの眼にカメラの機能を付けるのもいいですね。

そろそろトランス オーマー一号機としての稼働データも取れましたし、本格的な武装とかのとりつけも行う予定でしたから、そのついでに取り付けるとか。いや、両方作つた方が効果的ですか、ラインはいつも学校につくと自由に行動しますからね。ラインはラインで見回りを。何か異常を発見したら僕の眼鏡に位置情報と、中継での情報伝達を行えるようにして、僕の伊達眼鏡自体にも録画機能を付ければ、二人分の映像が……

「……
「って何で僕が中華料理店に居るんですか!？」

「なんでって、お前が考え事にふけってるから、引つ張ってきただけだぞ」

「それが問題ですよ！」

ほらー、机を挟んで反対側の方から鳳さんがジト目で僕を見てるじゃないですか。少し悲しそうな感じも混ざっていますね。申し訳ご

「ざまません。これが当家の鈍感一夏です………とりあえず謝っておきましょう。兄さんに聴こえないように………」

「（鳳さんごめんなさい……）」

「（いいわ、一夏だからしょうがないものね………ハアツ……）」

「（本当にごめんなさい）」

おもいつきりため息ついてますよ……本気で兄さん気づいていないんでしょうかね？さすがにこれに気が付かないともなると呆れるしかないですね………

「なんだ、二人で内緒話か？仲いいな」

だめだこの鈍感兄さん………

「誰のせいなのか気づいてくださいよ（きなさいよ）」
「？」

だめだ……本格的に、家に帰ったらIS用スタンガンを使わないと………

「それ喰らったら死ぬから」

何故ばれたんですか？自分に寄せられている好意には気が付かないのに………

「まあいいです。僕は麻婆豆腐定食お願いします」

「俺は天真飯で」

「はいはい、分かったわよ、麻婆定食一つ、天真一つね」

鳳さんが厨房の方へと歩き出した時、袖口から見えた腕が………

「痣？」

青黒いとも現すのがちょうどいいような色をしていた。

「鳳さん、腕、どうしたんです？」

え、という感じの顔をした後、何かを誤魔化すような感じに、

「何でもないわよ。ちよつとぶついただけ」

「ん？鈴、気をつけるよ」

「そうね」

すると、これ以上痣を見られたくないのか、厨房に走って行ってしまった。

おかしい。

ただこの一言に尽きる。

走っていくときにほんの僅かに、違和感が……もし、足をけがしており、それをかばうように行動していると仮定すれば、当てはまり、ただぶつけたなどの怪我ではないことが分かります。それに合わせ、左腕の痣。喧嘩でもしたとすれば、この怪我の数は分からなくてもないですが、それはあくまで男子がするようなタイプの喧嘩で、当てはまることであり、女子の口喧嘩というか陰険の手口が多用されるようなタイプの喧嘩では、そうそう、大きな怪我はしません。

「まさかとは、思いますけどねえ……」
鳳さんが、連中からいじめなどを受けているとすれば、見事に解決。鳳さんという、ストレスのはけ口を見つけた連中が、前みたいに暴れる必要ありませんからね。そして、それは同時に鳳さんの怪我の理由にもなる。

「ん？蓮、どうしたんだ」

どこか、人懐っこさを感じさせる、いつも通りの顔の兄さん。さすがにある程度推理できる状態なんですから、少しは鳳さんの怪我のことを考えるとかはないんですかねえ、まあそれでこそ兄さんとも言うべきでしょうね。

「兄さん、鳳さんにちよつと注意を払ってください」

「？鈴がなんかしたのか？」

「いえ、鳳さんの怪我、ヤツの仕業の可能性があるので」

「……そうか」

他のお客さんもいるものの、僕らのちよつと重苦しい雰囲気を感じ取ってしまったのか、しばらくの間、店内は静かになってしまった。

「「「ごちそうさまでした」「」」

店内に、子供の三人分の声が響き渡る。先ほどまでのような重苦しい雰囲気はどこにも感じさせず、快活で元気な子供達。という雰囲気があふれ出ていた。

「いやあ、おいしかったですね。また来たいぐらいですが、今度は家に来てもらいましょうか？ねえ、兄さん」

「そうだな、なんか飲食店やっているとかじゃないから普通の家庭料理ぐらいしか出せないけどな」

この店の看板娘ともいえる少女と、二人の少年が楽しそうに喋る光景。周囲の他のお客さんからは、『ああ、若いなあ』とか、『ほほえましい』、といった感じで見られていた。

「じゃ、じゃあ、今度行かせてもらうわね」

「そうですね。兄さん、すみませんがちょっと先に帰りますね、鳳さん、ちよつと心苦しいですがお題請求は兄さんに、ではっ」

片方の少年は、返事も聞かずに店から飛び出た。

「ライン、ちよつと乗せて」

少年が、夜の闇の中、なにもない道路に向かって言う、すると、

「どつぞ」

ラジコンのようであるものの、それよりは圧倒的に大きく、自意識

を持った者が現れ、その天井がガシャンガシャンという音と共に変形し、人が乗りやすい形になる。少年は、その上に、スケボーに乗るように乗り、ラジコンのような物はヘッドライトをつけ、走り出す。

「えーと、こっちのパーツを外してっ」と

蓮は、自宅に戻るなり、すぐさま自室に飛び込み、眼鏡の製作に入る。もともと、計画していたものだったので、材料などはあり、足りないものも、常時、呼びパーツとして保存しているものを使用すれば簡単にできた。

そして、いま、彼が行っているのは、ラインのパーツの付け替えである。

目に撮影などの機能を取りつけること自体は簡単だった。そして現在悪戦苦闘しているのは、武装の取り付けである。

この武装はいつもは隠せるようにしてはいけなくてはいけない。常時そんな物騒なものをちらつかせていてもいいことは何一つない。そんな危ない物は外しなさい、とか学校の先生が言いながら取り外す時間もよこさないうちに壊される。

そして、武装と同時に、エネルギーのシステムを変えている。これまでは充電式のエネルギーだった。それでもどうしても稼働の限界時間が激しく動いた分だけ早くやってくる。激しく行動してもエネルギーの消費を可能な限り抑える。

一応これまでに、稼働限界時間をなくす理論自体は、完成し、保存してあり、それを取り付ける。

ただそれだけであることが重要だったりしてしまう。

同時にISの稼働限界を消す理論でもあったりしてしまうから・・・
前世での某Oがふたつ付くロボットアニメのことを考えていたら完成してしまった機関。

トライアングルシステム、この機関についてはいわず説明するにしても、まあ、ISのコアの技術の応用。コアは表向きは東さんしか作れない、となっていていますが僕も作れるんです。

とまあ、ISと同じように粒子化させる、という手もあるはありますが、それでは『トランスフォーマー』である意味がない。『トランスフォーマー』であるために変形を組み込む・・・腕の変形で、銃が表れうようにするために

「で、できたあ」

そう言いながら席から立ったところ、後ろにひっくり返ってしまい、

「お、おい、蓮！」

兄さんに心配されたところで初めて時間に気が付く。

・・・結局出来上がったのは日が昇ってからのことでした。

怪我（後書き）

亀の歩みですが、読んでくれると嬉しいです。

その日から、ラインは学校内の巡回から、凰さんの見張りというシフトに変更し、僕と兄さんも、できる限りは凰さんのことを気にするという方針になった。僕が見張っていないと暴力的になる兄さんにもしつかり言っておきましたよ。独断専行しないようにと……どれくらい意味があるかは分かりませんが。

「おはよー」

教室のドアを開けると同時に兄さんと僕はそろってみんなにあいさつする。

「……あ、おはよう」「……」

と、挨拶を返してくれるのは、ほとんど女子である。

さすが兄さん、一級フラグ建築士なだけがありますねえ……

まあ、これもあの銀髪から嫌われる原因の一つでもあるのですが。そんなに女子と仲良くしたいのなら、兄さんみたいに人に対してやさしいキャラになればいいのに……

「あー蓮君眼鏡かけてる」

「あ、ホントだホントだ」

「視力落ちたの？」

ははは、この人たちも兄さんに対して好意を抱いているんですね。まあ、誰に好意を抱いていようと、話す時の対応を変えたりする必要はありませんからね。誰に対しても（敵以外は）優しくって感じなのがモットーなのが僕達兄弟のモットーですよ。姉さんは……どうなんでしょうね？意外とやさしい人な気がします……

「気が付いてくれてありがとうございます。別に視力が落ちたわけじゃないですよ」

「じゃあ伊達眼鏡！」

「ファツション？」

「イメチェン？」

「はははは、違いますよ。ただの眼鏡じゃなくてですねえ、いろいろと機能を付けて見た感じですよ。ために着けてみますか？」
ちよつと眼鏡に手を掛け、何時でも貸せますよ、という感じを少しだけ見せて見ますと・・・

「・・・あ・・・」

三人の顔がカア〜という感じで赤くなり、何かを言おうとしているのは分かるものの何を言いたいのかが分からない、といった感じになつてしまう。

「すいません、男が着けているものを女子が着けるのはさすがに恥ずかしかったですね、変なこと言いました」

あまりにも酷いことを言ってしまったかもしれない、先ほどは今ので、許してくれなかつたらどうしましょう・・・
つて、あれ？何で今度は何か『怒った』というか『残念』、みたいな顔をしているんでしょうか？なにか悪いことをしましたっけ？

「えーと、なにか悪いこと言いましたか？」

三人はちよつと睨みながら、

「・・・自分の胸に手を当てて考えてよ」

といい、自分の席へ戻ってしまいました・・・
あれえ？なにか悪いことしましたかあ？

「蓮、落ちついてよく考える・・・」

「はい、兄さん・・・」

兄さんのアドバイスはしつかりしたものが多いのですが・・・
・今回は余りいいアドバイスではないですねえ。三人が言ったことと同じです・・・全くどうしたらいいんでしょう？まあ、席も周囲の方々ですから、今日中に何か打開策を考えて、実行するなり伝えるなりしましょう。

駄目ですね、まったく。三人の雰囲気というかなんというか……放つ気が……重いんですよ。クラス全体に悪影響を与えているんですよ。いつもなら騒いでいる人達まで静かにしている……異常事態ですね。それになんかみなさんそろってお前のせいだっ、目をして僕を睨んできますし……勘弁して下さいよ。そんなに悪いことをした覚えはありませんよ……

……本当にどうしましようか？週末にどっかおいしい飲食店にでも誘いましようか？というかそんなので喜んでくれるでしょうかね？まあ、女子は甘いもの好きですよ。奢ってあげるという形式にすればダイジヨウブデスヨネ？

放課後の教室にて……

「ということで週末に31アイスクリームに行ってみなさんの分を奢ろうかと思うのですが、どうでしょうか？」

「え、それって」

「う、うん、ねえ」

「ホントに？」

「ええ、何か問題ありましたか？やっぱりどこかへ僕と出るのとは問題ありましたか？だったら別のだいあ」「いえ、これでいいです」

「……は、はあ」

三人とも顔が赤いですよ、やっぱり何か怒っていらっしやるんでし

ようかね？

「（これって、私達まとめてだけど）」

「（デート・・・だよな？）」

「（うん、そう思う。にしても・・・）」

「（（兄弟そろって鈍感だなあ））」

僕の前に居る三人がこそそこそと何かを話し出したその時・・・

『なにやってんだてめえら』

隣の隣ぐらいの教室から、兄さんの怒声が響いてきた。

「あーあ、やめてくださいねって言ったのに、まったく・・・みなさんすいません。ちょっと兄さんに加勢してきます。すぐ戻りますんで待っていてくださいね」

「（はーい）」

大丈夫そうですね。まあこの方々なら様子を見に来るとかしませんよね。

教室を飛び出し、隣の隣の教室へって・・・ラインが隠れて映像を撮っていますね。では、こっちは撮影等を気にせず本気で殴りあえるというわけですね。

兄さんはっと、うわあ〜、30vs1って、さすがに兄さんでも無茶ですよ。鳳さんをかばいながら戦っているみたいですし、無理がありますね。まあ、僕がいるのでそう簡単には無理ですけどね。それに、30くらいなら・・・

「兄さん、勝手に先行しないでください、援護が難しくなるでしょう」

っと、教室に入る時に言いながら、手前に居た一人を蹴り飛ばす。

「あ、わりいわりい、あんまりひどかったもんだから、つい我慢できなくなっちゃった」

兄さんはこちらを見向きもせず、手前の一人を殴る。

「まあいいですよ。どうせ分かっていたことでしたからっねっ」

前の一人に両手で掌打を喰らわせ、そのまま、後ろに居る奴に向け

て、両手の肘鉄をねじ込む。

「く、貴様、てめえら、邪魔すんじゃないやねえよ。俺達がどうしてようと自由だろうが。おめえら、殺つちまえ」

銀髪のおほがわめくと同時に、30人余りが一斉に動き出し、攻撃を仕掛けてくる。

「ふう、何で篠ノ之道場で最強って呼ばれていたか身をもって教えてあげますよ」

前から来た一人の水月を右手で殴り、左手は殴りかかってきた別のあほに向けて裏拳を放つ。後ろから椅子を持って、殴りかかって来た体格のいい奴の頭を殴る。

そんな調子で数人を殴り飛ばしたところで、さらに人が増えた。

「大多数で少数をやるのは気に食わねえなあ」

赤毛のひと、黒毛の奴が、僕がいる方とは違う、もう一つのドアから教室に入り、暴れ出す。

「て、てめえら、覚えてろよおおー」

銀髪の馬鹿は、自分が一人になってしまうと、風のように逃げて行った。

「助かりましたよ」

「ありがとな、つと、鈴、もう平気だぞ」

兄さんが鳳さんに声をかけると、落ちついたのか、こっちに来る。

「まあいいって、俺達もあの猪股にはイラッと来てたからな」

「へえー、猪股って言うんですかあいつ（言うんだ）」

「自分が目の敵にしていた奴に名前を知られていないって、なんか可愛そうなやつぢゃなあ」

「うわー目の敵にされてたんだ」

「そこにも気づいとらんかったんかいな」

「っとまあ、俺は五反田弾、こつちの黒いのは御手洗数馬だ」

「よろしくな」

ああーだいたい想像はついていましたけど原作にいましたねえ、御手洗数馬さんの方はほとんどまったく出てきませんでしたけど・・・

「僕は織斑蓮です、こちらは兄の織斑一夏です。そしてそちらのかたは鳳鈴音さんです。先ほどは本当にありがとうございます」

「うちの親と同じ名前だ・・・」

へえーそんな細かいところまで覚えていませんでしたからねえ。でもそれって不便ですねえ。偶然にも近くに居た時にどちらかが名前を呼ばれば大変なことになりますからねえ。

「・・・ありがとうございます」

そう小さくつぶやいた人がいる方に、みんなが向く。ちょっと悪戯っぽい笑みを浮かべながら。

その笑みを向けられた人は、ちょっと悔しかったのか、奥歯を噛みしめるようにしながらも、

「ありがとって言ったのよ」

もう一度僕達に向かって言った。

勝利への布石

「ふざけないでください」

「この危険な乱暴者たちを処罰してください」

「私達の子供はこの子たちに殴られたのですよ」

「何をためらう必要があるのですか」

「少年院にでも送って下さいよ」

「先生も管理不届きで教育委員会に訴えますよ」

「最低でも転校させてください」

「できないのならクラスを変えてください」

「・・・・・・・・・・・・・・・・何なんですかこの、クサイおばさん達は・・・・・・・・」

例の事件の翌日

『5年1組、織斑一夏くん、織斑蓮くん。5年4組、五反田弾くん、御手洗数馬くん。至急職員室に来て下さい、繰り返しま・・・・・・・・』

』

「ちょっと、織斑君達どうしたの？」

「何かあったの？」

「おい、織斑、何やったんだよ」

ははは、心配してくれる人がいるのは嬉しいですね。まあ、兄さんの人望が厚いからでしょうね。

「兄さん」

「ああ、あれだな」

「ええ、普通に帰って来ますよ、みなさん。ご心配なく」

「……………いってらっしゃい」……………

「……………」

ははははは、楽しいクラスメート達で嬉しいですね。みなさんに迷惑はかけられませんね。このクラスはまだあのクソ野郎の影響下じゃないですからね。もし僕達がこの駆け引きで負ければ、こんなに明るいクラスではいられませんね。

「お、一夏に蓮じゃねえか」

「そっちは弾に数馬か」

まあ、職員室の中から外で出会うのは当たり前でしたね。

「……………失礼します」……………」

「あ、来ましたね」

職員室の中に入り、担任の先生に、座らされた場所で待ち受けていたのは、加齢臭のきついどこぞの誰かの母親と、我らが姉さん、そして、赤っぱい髪をした若々しい方と、どことなくふんわりとした気配を放っている方でした。

そして、冒頭に至るわけです。

「うちの愚弟がすいませんでした」

姉さんが僕と兄さんの頭を机に押し付け、

「うちの馬鹿息子がすいませんでした」

隣で弾も赤毛の若々しい母親に抑えつけられ、

「ほんまにすいませんなあ」

ふわり、と数馬も抑えつけられる。

「まったくだわ、獣みたいな子供達をしつかりしつけられないなんて親失格じゃないですよ、あなた達、本当に母親としての自覚はありますか？」

おばさんがたの中央に立っていた指導者と思しき人が甲高い声を上げる。

「うちの子たちはただ集まっていただけなのに目の敵にされて殴られて……」

「……」

ああー話長いですねえ、よくそんなに話すことがあると思いますよ。そんなに騒いでいて疲れないんでしょうかねえ？にしても随分な言いようですなー。

「理不尽な暴力をするあなた達は独裁者にでもなりたかったのですか、それはただの虐めなんですよ。そして私たちの息子はその最初の毒牙に当てられて……」

「」

ああ、本当に酷い言いようですね。この人、本当にものを分かって言っているんでしょうか？独裁者は僕じゃなくってあの猪股とかいう銀髪ですし、いじめの現場を止めたら僕達がいじめを行ったことにされていますし。はあ、そろそろジョーカー切りましょうか。

「ひとつ、お聞きしてもよろしいですか？」

僕が口をあけると、先ほどまで休まず僕らに文句を言っていたおばさんを含め、全員が僕を注目する。そう、それでいい。僕に注目する。

「どうぞ、暴力でしか訴えることのできない野獣さん」

いくらでも言ってくれてかまいませんよ。言った分だけ全て自分にダメージは数倍、数十倍、いやもっとそれ以上になって帰ってくる

んですから。

「あなたの名字は何ですか？」

ぶっ、とおばさんの仲間や、横の方、ましてや、知らないふりをして自分の仕事に取り組んでいた先生方が思わず噴き出した音が僕の耳、そして僕の正面で僕と対話している耳に入る。

「猪股ですわ、あなたがたが目への敵にしている子の母親ですよ。そして自民党代表の猪股隆志の妻ですよ。あなた方程度の存在なら権力を利用して戸籍ごと消すことも可能でしたのにそれをしないで差上げたのですよ。感謝しなさい」

「ああ、あの銀髪の……」

リーダーの母親でしたか。それに、随分な権力者が……そう言えば、現在与党で政権を取っている自民党の代表ツて若かったですもんね。

「ええ、そうですよ。貴方がトドメといわんばかりに逃げるルートに頭の上からたらいが落ちてくるように仕掛けられた、嘆かわしい子の母親ですよ」

いやあ、にしてもあの簡易的な罠に本当に引っ掛かってくれたんですね。かたずける時にたらいが既に落ちていたんでもしかして掛かったのかなあ？みたいに思っていたんですが。でも、リーダーの立っている場所が分かりましたね。権力をもった議員の息子。まあ、陥れる方法はいくらでもありますね。まあ、その議員という立場を盛大に利用して、あの独裁者を落としてやりますよ。

「戸籍ごと消さないでください、本当にありがとうございます。でもあと少し僕に時間をください、先生、一台パソコンを貸して下さい、そして猪股君をここへ」

「まったくもう、しょうがないですね、先生のパソコン壊しちゃだめですよ」

そう言っつて自分のパソコンを貸し出して下さる先生、ありがとうございます。

「パソコンなんてどうするのかしら。今は大事な話の最中なんです

よ。ふざけている時間じゃないわよ」

「真面目なことです。もうちょっとお待ちください」

パソコンが立ち上がり、さあ、始めますか、というとき。

「先生呼び出してなんですかね」

取り巻きを連れ、銀髪野郎が現れた。

さあ、これで勝利への駒はそろった。

勝利への布石（後書き）

ああ、何時になったら原作に入るんでしょう。

とまあ、考えながらやっているこのssを呼んでくれている方々、
本当にありがとうございます。

駒は手のひらの上

銀髪野郎の取り巻きの数は5人、もうちょっと連れてくるかもしれないと思っただけですけど……まあいいでしょう、連れてこられた取り巻きの方がダメージが大きくなるだけですしね。

「で、先生、俺が呼ばれた理由って何なんですかね」

口元に嫌味な笑みを浮かべながら先生に聞く。絶対に分かっている。それは当たり前のこと。この攻撃は彼が仕掛けてきたことなのだから……

にやにやと嫌な笑顔が先生の目にも映ったのか少し引いた感じが先生の顔にも表れる。

「昨日の放課後のことですよ、ちょっと先生来てほしかったんですよ」

「ええ、俺らを殴った奴のどうなるかの結果を聞けるんですね」

「武史ちゃん、本当に大丈夫なの？」

正面のおばさんが焦ったように、銀髪野郎に駆け寄る。というか武史って名前だったんですね。

「さて、全員揃いましたね、ライン、もういいですよ」

職員室のあいていた窓から銀色の物体が回転しながら飛んでき、僕の足元に変形しきった状態で、二本足で着地する。

「バイパスをつないで昨日の映像を」

「はいよ」

ラインが自分の右足を触ると、脛のあたりが開き、中から先端がUSBメモリの形をしたケーブルが現れる。

「な、な、な……」

猪股（母）は当然のこと、姉さんを含め、ラインのことを知っている僕達と先生を除き、時が止まっていた。

「何なんですか、この汚らわしい金属の塊はっ」

失礼なことですね、僕が寝る間を惜しんで完成させたトランスフォ

「マー初号機ですよ。」

「トランスフォーマー、ISに次いで戦闘能力を持つと思われる人工金属生命体です。開発者は僕ですよ。それに彼等は生命体です。ですから、ちゃんと自己意識を持っていますよ。戦闘に使うより日常生活での補助能力のほうが優れています。介護などに使えると思いますよ。データを開示する気はありませんが」

「な……」

「さて、話を続けましょう。ライン、変形させたその銃を元の状態に戻しなさい、映像は？」

「出たよ」

パソコン上には、とてつもない映像が流れ始めた。そう、蓮の考えていた惨状以上の物が。

『きゃあ』

たくさんの男子が一人のツインテールの女子を囲み、かわるがわるに殴り、蹴り、踏みつける。

『何だよその眼は、文句でもあんのか？ああ？』

銀髪の男子がツインテールの女子を言葉と同時に蹴り、踏みつける。

『喋れってんだよっ』

『がっ』

ツインテールの女子の水月に銀髪男子のストレートが入る。

『ったく、おい、サッカーやろうぜ、おらよっ』

銀髪男子が蹴ると、周囲の男子がそれに追従し、蹴る。誰も止めようとしない。周囲の男子がそれを見かねて、そこに居る者達は笑みを浮かべる。

『なんかいつも同じだどつまんねえなあ、これ今日まででいいや、

お前明日から体で払え、当然下の意味でなあ』

うすら笑みを浮かべたまま普通に口にする。周囲の者たちもだれも戸惑ったり様子はない。ただ、普通に笑うだけ。

『なあ、おまえら、今日でこれもおしまいだ。後悔のねえようにいたぶつとけ』

その言葉を待っていましたというように、足の雨がツインテールの少女に降り注いだ。そして、

『なにやっつてんだ、てめえら』

織斑ヒトコ一夏の怒声が響く。

『つつ、織斑兄か、邪魔しやがって。前々からてめえの存在は邪魔だったんだよ。お前とお前の弟のせいだな。1組だけに影響力が浸透しねえんだよ。うちのおやじは自民党の代表になって、日本に影響を与えてるぐらいなのにな……おまえら、殺すつもりでやっちまえ』

つと、ここからは皆さんもご存じの展開ですね……

・

ガタンッ、

『ふざけないください。こんなのうちのこがするわけないでしょう』

猪股（母）が両手を机に叩きつけて叫ぶ。まあそうでしょう。どうせ彼のことだから家では優等生だったのでしょう。なのに、蔭ではこんな一面を持っていた。まあ普通に信じることは不可能でしょうね。

『ですが真実ですよ、猪股さん、ねえ、猪股君？』

銀髪野郎の顔に動揺が浮かんでおり、僕達を排除しようとして来た母親集団までも、自分の子供がこんなことをやっていたのかと知ると、恐怖を感じているようだった。

『つ、作りものだ。こんなの俺がするわけではないだろ。さてはお前から俺達をはめる気だな』

『さて、どうでしょうか？では鳳さんと呼んでみましょう。そうすれば真実は分かるでしょう？』

『そうですね、ちよつと待っていてください』

先生が立ち去り、校内放送をかけようとしていたころ。

「証拠がなけりやいいんだよ、なあっ」

猪股が懐からハンマーを取り出して、パソコンを殴り、ハードディスクもろとも大破する。そして、その勢いでラインを殴ろうとした瞬間、彼の手からハンマーは消えていた。

「どこにつ」

「ここだよ」

ラインの手によりハンマーは奪われていた。

「今の行動は自分が本当にやった行動だと自白したも同然ですよ。それともう一ついいことを教えてあげます。先ほどの映像はネットにアップしておきましたから、例えばデータを持つているラインを破壊したとしても、なかったことにするのは不可能ですよ。動画サイトも僕が新しく立ち上げたサイトです。そこは年会費を払わずとも動画を見れるサイトですからたくさんの方が自由に見ていますよ。それに、さまざまなチャットや掲示板、ツイッター、フェイスブックにもサイトへの入り口を作っておきました。ですから閲覧者は多いでしょうね。まだアップされている動画も少ないですからね。サイトの menu 画面に pickup 映像つてのを作っておきました。その中に衝撃映像つてもね。そこで一番上に出ているのはこの映像です。言いたいこと分かります?」

「世界中で見られてるってか?」

「ええ」

「肖像権違反ですよ」

喰いついてくれると思っていましたよ。法律は重要なポイントですからね。このポイントに誘導してしまえば僕の勝ちです。

「そうですね、ですがあなたの御子息は自分自身、そして他人に指示をして怪我をさせている。さらにその罪を僕らへ転嫁しようとした。そして、鈍器を所持しており、公共の物品を壊しました。今そこで。そしてあなた自身も僕を、いえ、僕らを獣呼ばわりした。あなたは、名誉棄損ですね。さらに母親が、なんでしたっけ? 取りあえず賤けが何だかいつて、姉さんを母親呼ばわりした。それも一つ

の名誉棄損ですね。さて、そんなあなたが法律に関して僕達だけを語れるとでも言うのですか？」

「ここまで言ってもまだ何か言いますかねえ？言ったら墓穴を掘っているだけなんですけど」

「そ、それは・・・だつたらもしあなたが権力に頼るとかだつたら僕にも手はありますよ、国際社会という力を大いに利用しますよ、世界は今の映像だけで僕の味方になってくれますよ。日本は外交に弱いですからねえ。国際社会からの目、というものにおされて党の代表降ろされるかもしれないねえ」なっ

動揺が隠せていませんね。こういう口先での戦いなら動揺を見せちゃいけませんよ。権力に頼った争いをして来たんでしょ。それに、そろそろですよ。」

「鳳さんが来ましたよ」

さあ、本当に相手のキングを獲れる自軍のクイーンがそろいました。これでチエツクメイトですね。

「では鳳さん、正直に答えてください。貴方の怪我はどうしてできたのですか？」

「・・・そこに居る、猪股達に・・・暴行を受けました・・・」

「そうですね、猪股さん、これ以上の否定はあなたの立場を悪くするのでお勧めしませんよ。それと鳳さん、後であなたに危害を与えた方々の名簿を作っておいてください。彼らを罰することができません。猪股君、彼女の書いた名簿を悪戯するのは得策ではありませんよ・・・あ、忘れていましたがここまでの出来事全て全校放送を利用して5学年全員に聞かれています。これからの自分の立場を考えたほうがいいですよ」

「く、クソ野郎」

「どれだけ言われたって構いませんよ。僕は身内の人を助けられればそれで十分ですから」

僕はその言葉を発した時、敵である母親の集団から睨まれた。

「何もあそこまでやる必要はなかっただろう、お前は何になるつもりだ！」

「すいませんでした」

現在職員室の入り口付近で姉さんにつつり絞られているところですよ。

「まあ、あそこまでやる必要は確かになかったかもしれませんが、でも、これまで彼の独裁に僕らの学年は被害を受けていますし、ささやかな反撃ですよ」

「ささやかではないわ、バカ者め」

「すいませんでした」

そう言いながらも姉さんの顔にちよつとだけ笑みが浮かんでいるのは嬉しいですね。

「ふん、まあいい。これからは良くものを考えて行動しろ。お前はあの天災に深くかかわってしまったせいで物事を小さく見えている。実際にお前がやっている行動はお前が思っているほど小さいことではない。まあ、平気な顔をして大きなことをできるのはお前の利点だろう。それを最大限に生かせよ」

「はい」

姉さんがその場から立ち去って行き、玄関から出ようとした時……

「ああーーーーー、放送機材電源つけっぱなしだったあ！」

そう思わず叫んだ瞬間に、5学年の教室の方から笑い声が聞こえてきたのはご愛嬌だろう。

使えるものは使え

「バンドやりませんか？」

「……はあ……？」

あれ？思っていた以上に受けが悪いですね……

いやー、この世界前世にあったヨーロッパとかニコニコしちゃった動画みたいな動画投稿サイトが無かったんですよ、ですから前回僕がああの銀髪野郎をはめるために新しくサイトを立ち上げたんですけどね、閲覧者が凄いこと……それに毎日新しい動画が投稿されていて……毎日ネズミ算のような勢いで閲覧者が増えていて……いろんな企業から広告を置かせてほしいって、依頼が来ているんですよ。懐に金が入ってくるなんて初めてですよ。これまではいろいろと節約してお小遣いで電子機器とか買っていたのに……嬉しい限りです。でまあ、前々からやってみたかったことがありましてですね、この世界、なんとボカロとか色々なアニメとかが無いわけです。ですから、ボカロ曲とか世界レベルではやらせてしまえ、という考えです。で、折角神に音楽系列の能力を上げてもらったのだから、自分がやってみたくまりました。

そして、冒頭に至るわけです。

「弾、ベースを練習していることは分かっていますよ」

「なっ、何で知っているんだよ」

「君の指先を見れば分かりますよ。少し切れた後がありますね。その後はギターかベースの弦で切れた後、それとこの前君が学校でつぶやいていた言葉はベース関係の言葉でした。ということから判断して鎌をかけて見ただけですよ」

「……」

さすがにやりすぎですかね？あの僕が記憶喪失になっていることに気が付いた箒風に言ってみましたけど。

「弾はじゃあどうします？」

「……俺は乗った」

はい、お一人様ご案内。では次の落とし所は……

「数馬はどうします？弾に付き合って少しはできるんでしょう？」

「はいはい、俺も乗ったわあ」

二人目、さて、あとは兄さんと鳳さんですね。

「……鳳さん、兄さんにいいところ見せられますよ……」

「なっ……いいわ、私も乗ってあげようじゃないの、」

一夏も当然参加するわよね？」

あと一人となってしまうは落としにくい人出会っても集団心理を利用して簡単にころっと落ちちゃうんですよ。これ、話し合いの基本ですよ。

「わかったよ、俺もやってやるよ」

「ありがとう兄さん」

ほら、ね……

さて、しばらくは曲の再編に取り組む必要がありますね。一曲一曲
思いだすのは骨が折れそうなことですねえ、まあ、一から作るより
は圧倒的に楽でしょうね。プラス思考でいきましょう。

僕と凰さんがギター兼ボーカル、弾がベース、兄さんがまさかのド
ラム、数馬がキーボードですよ。

さて、仕事に戻りましょう。やらなくてはならないことは曲の再編
だけじゃなくて、サイトの整理、そして新たなトランスフォーマー
の製造、山のような量が残っていますよ。

ピータービルト379、探せばあるもんですね、というか結構ヤバ
い線を利用してみました。猪股ん所の裏金をちよつと銀行のシステ
ムをハッキングしてみまして、いろんな人物にばらまいてみました
よ。当然、銀行のセキュリティにはばれていませんよ。ばれている
ようなことなんてやる必要が無いじゃないですか。んで、その金を
ちよつと自分の物にしてやりまして、そのお金でショッピングです
よ。

さあ、彼とはもう学校でもありませんからね、文句は言われません
よ。誰か予想が付いたところで証拠が無い物はどうしようもないで
しょうからねえ。さて、またひとつ利を得ましたよ。というか僕こ
こ最近腹黒いですね、少しはいいことをしましょう……

・・・
と、それはさておき、最初に出す曲はある程度聞いた人に印象を残さなくては後で詰まります。というか後が続きません。ですから、前世で良い曲と評価されていた曲を最初に出さなくてはいけません。まあ悩みましたよ。

最初だけ良い曲でも後が続かなくては駄目、でもよい曲でなければ次のことは考えられない。難しいポイントでしたね。

というか、なにもこの動画投稿サイト僕が維持し続ける必要もない気がしてきましたよ。他の誰かやってくれそうな方を探し出して、その方に依頼なり何なりをして僕の後を引き継いで頂きましょう。少しでも自分でやらなくてはならないことを減らす。他の人でも可能なことを他の人に任せる。一人が複数の仕事を抱えていたって時にできることには限りがありますから。

まあ、それはさておき、最初に出す曲はボカロを聞くことがある人ならばは確実にご存じであると思われる、『メルト』にしようかと思えます。まあ、あのあたりをチョイスすることが妥当だと思うんですが・・・

まあ、どちらにせよ一つやることは片付きました。次は僕のサイトの後継者を探しましょうか、重みは少しでも減らすべきって、感じます。トランスフォーマーの方は高校に行くまでに数をそろえればいいんですから、なにも今すぐの課題ではないですね。さあ、いくらでこのサイトを買収する人間が現れるでしょうね？企業がこのサイトを利用すれば大規模な宣伝事業になりますからね。楽しみで

では、おやすみなさい。

使えるものは使え（後書き）

学園に早く行かせたい・・・

駄文ですが、これからも読んでくださると、ありがたいです。

そして読んでくれてありがとうございます。

結果報告と・・・・・・・・

例のサイト、売れちゃいましたよ。

聞いて驚けてやつですね、なんと、700万円ですよ。

それなりに、世界レベルのシェアを持っている企業が買収してくれました。えーと、藤原産業だった気がするんですけど・・・・・・・・

・まあ、名前はどっちでも良いにしても、凄い会社なんですよ。

車や、電車の部品、子供のおもちゃ、さらにはISパーツまで、といった企業ですからねえ。宣伝に使ったり、いろいろするみたいですよ。これからは動画を投稿できるようにするには、会員登録が必要で、年会費がかかるとか。まあ、そんな感じみたいです。で、半分の350万円は募金してきました。残りの半分は貰いましたけど・・・・・・・・

さてさて、まあ、そのお金を利用して、トランスフォーマー式号機オプティマス・プライムが完成しましたよ。形は、トランスフォーマーの実写版の映画と同じです。じゃなきゃ意味無いじゃないですか・・・・・・・・

それと、兄さん達とやったバンド、例のサイトにアップしておきました。結構人気ありますよ。「盗作」ですけどね・・・・・・・・

猪股が正式に転校したし、つるんでいた人たちも、転校したり、おとなしくなったりと学年に平穩が戻り始めていてとつても気分がいいです。

『ピンポーン』

?、どうしたんでしょうか?兄さんも帰ってきていますし、鳳さんも、もう兄さんと一緒に練習をしているはずですし、弾?弾は今日用事があるって言ってた気が。数馬も今日は風邪で学校を休みましたし、姉さんなら連絡が帰ってくる前に来ますしねえ・・・・・・・・

・・・・・・・・どなたでしょうか?まあ、何かの勧誘なんですよ

え、姿をかくしているのさ。酷いもんだよ、親にも能力で姿を見せないいんだから。まあ気配とかでどこにいるかはだいたいわかるんだけどね。そうそう、君と同年だよ、織斑蓮君」

なんで僕だと・・・・・・兄さんの可能性もあるでしょうに。警戒を、少しはしておきましょうか？

「まあ、どうぞお入りください」

『では、失礼するよ。おじゃまします』

と、中に入って来たのはやはり一人しか見えない。けれど、やっぱり誰がいる。そう、今、僕の後r！

半回転して、後ろを向き、左手を肩の高さにまでもつていき何か当たった瞬間に握る。そして、右手をのばして、布らしきものに触った瞬間にこちらも強く握って、背負い投げを仕掛ける。背中を打たないように、両手で、抱きかかえるようにして、衝撃を和らげる。

「きゃあ」

消えていた姿が現れ、黒い髪のツインテールの少女が現れる。

「もうちょっと気配を消してみるといいですね。姿が消せる超能力ですか？本当にそれだけなんですか？移動した瞬間の気配を感じることはできませんでした。姿を消している間、気配を殺すことができるのであれば、あなたはとても強くなれます。それと、もう一つの隠されている能力もマスターされるのが良いかと」

「・・・・・・」

目をそらしましたね、ってことは当たりですね。

「すごいな君。あの攻撃に対応するなんて。武術の達人とかいう人たちも一撃で昏睡していたよ」

「・・・・・・妙に鋭すぎる一撃だことで・・・」

「さて、どうやら、上で楽器を練習している音もするのだが。まあその子たちにもようはあるが、まずは代表であると思われる君と話をさせてもらえないかな？」

「ええ、構いませんよ」

僕が代表？何かそんなことありましたっけ？トランスフォーマーは

公表していませんし。

「では君の部屋にでもお邪魔させていただこう」

「え？僕の……部屋？」

「ははは、君の視線からするとここかな？」

玄関からすぐに飛びこめる部屋、そう、そこは僕の部屋。機械類であふれた、人に見せたくない部屋。姉さんの部屋、よりはまともな部屋ではあるものの、見られるとヤバい機械類の塊の部屋……

「ちよつ、待つ」

僕が言いきる前に、正輝さんは部屋のドアを開けた。

「え……ISのコア？」

あ、一番見られるとヤバい物を……僕の顔から血が引いて行くのが分かる。

「あ……えつと、その……」

正輝さんの顔からも血の気が引いている。みていてそれがよくわかる、一般家庭にぼんぼん置いてあるようなものじゃないのは誰にもわかってのことだから。

「これは……本物かい？」

ここで嘘をついてもどうせ後々ばれるでしょうし……

「ええ、本物です。束さんに作り方を習い、自分で作りました」

「……」

これまで空気だった、正輝さんの娘まで声を上げていますね。まあ、ISのコアを作れるのは、束さんだけってことになっていますからねえ。姉さんが、僕のことを公表するのを禁止したんですよ……「ちよつとまつて、ISコアを作れるのは束博士だけだつて、ニユースで……」

「作り方さえ分かれば誰でも作れますよ。まあ、僕の作るものと束さんの作るものは少し形式が違うんですけど、基本的な事は何一つ変わりませんよ、えーと、お名前をうかがっても？」

「美優、美優っていうの」

へー美優さんですか。正輝って名前と全然違いますねえ……

「ここでのことは口外しないでおくよ、蓮君」

「その方向でお願いします、というかそうしないとあなたの命が危ないですね。僕自身にあなたをどうこうする意思が無くとも、僕の腹心の部下達の手によって・・・ライン、オペティマス、武器を収めて」

家の外と、扉の向こう側からガシャンガシャンという何かが変形する音になる。

「な、なんなんだい？」

「トランスフォーマーですよ。あなたも映画を見ましたか？」

「み、見たけど・・・実現化させるって・・・」

そんなに驚くことでしょうか？結構簡単にできましたよ。

ちよつとISの理論をいじってやれば簡単にできてしまいましたよ。

「では、このまま僕の部屋で構いません。もう見られたくないものも見られてしまいましたし。では、本題に入りますでしょうか」

第二回 IS 世界大会

「分かりました、そちらの意見をそのまま飲みます」

なぜこうなったかは分かりませんが、CD化だそうです。

盗作なんですけどね・・・・・・

・・・

「ありがとう、これで少し肩の荷が下りたよ」

「いえいえ、それほどのことではありませんから」

ふう、さすがに大企業の会長と話すのに重圧がかかりますね。意識

していないんでしょうけど気配が重いというか何というか・・・

・・・

「それとね、この子のこと任せた」

正輝さんは美優さんを手でこの子、この子、という感じでアピールしながら、とんでもない発言をする。

「「ゑ」「

当然、美優さんもそんなことは全く思っていなかったらしくて、思わず声を上げてしまっている。そして、正輝さんの暴走はそこまで止まらずに、

「大丈夫、君の学校に転校させるし、君の家に住み込ませるから」

・・・爆弾を落とした・・・

・・・

「えーと、まあ、これからはよろしくお願いします」

「こちらこそ・・・うん・・・」

今現在、美優さんと僕の部屋で二人つきりにされています。正輝さんは、兄さん達にも同じことを言いに行くと言っていました。そうそう、取りあえず頑張って、僕達の家に住み込ませることはやめ

させました。

「お茶・・・飲みます?」

「お願いします」

喋りにくい雰囲気であったので僕はそう言って台所へと逃げた。

お父さんがあんなふざけたことを言った時はさすがに困っちゃったな・・・

学校のみんなは、私が藤原産業の一人娘だって知るとペコペコと頭をすぐ下げるようになり、私には本音で喋らなかつた。同級生の親達は、私と仲良くしていれば利があるとでも思ったのか私に対しては極度に甘い。先生ですらそうだった。

でも、さっきまで正面にいた少年は違った。私が自分の存在がばれ
てから、攻撃を仕掛けた時も軽くないなし、欠点を教えてくれた。投げ飛ばされた時も、優しく抱えられていなかったら、床に強く打ちつけられていた。

私は転生者、神様はイレギュラーな存在もいるって言っていた。私
が知っているIS、インフィニット・ストラトスの世界には、織斑
一夏に弟なんて居なかつた。

彼はいつたい誰なんだろう。私の心の中の大部分を一瞬で占めてしま
ったあの少年のことを知りたい・・・・・・・・この気
持ちは何なんだろう・・・・・・・・

「織斑・・・・・・・・蓮・・・・・・・・」

私の口からは泡のように彼の名前がこぼれた。

「織斑・・・蓮・・・」

僕の部屋の中から美優さんの声が聞こえた。

彼女の声は間違いなく自分の名前を言っていた。

「なんか敵対フラグ建てたんでしょかねえ？」

自分以外には聴こえないように懸念される事項をボソツとつぶやく。さっき投げ飛ばしちゃいましたからしょうがないと言えましょうがないですし、能力の欠点まで見抜きましたから、僕を倒すことをつの目標にするかもしれませんし。
はあ、胃薬・・・買おうかな？

・・・

美優さんが転入してきて、なんか凰さんと喧嘩というか、じゃれあってばかり。

なんかCDでバカみたいに儲けてる。もちろん学校のみんなには、僕達だということ隠しています。

姉さんが第一回IS世界大会モンド・グロツソで優勝。

6年生となり、事件は起こった

第二回IS世界大会、僕は兄さん、美優さんと共に、姉さんから招待を受け会場に来ていた。

姉さんと、兄さん。僕と美優というなぜか分からないがこういう組み合わせで近くのホテルの部屋を取っており、決勝は明日の朝、との事だったので僕達はみんな寝てしまった。

翌朝、

姉さんは、選手ということで既に会場に向かつており、僕達と兄さんは、会場の広場11時に始まる決勝より一時間前、つまり10時に落ち合う予定を立てていた。ところが………

「遅いですね、兄さん……」

「蓮、織斑君探しに行かなくて大丈夫なの？」

約束の時間を15分過ぎてもまだその姿を兄さんは見せない。

「そうですねえ、姉さんのところに行ってみましょう。間違っつてうちに直接行っているかもしれないから」

「ふーん、分かったよ。じゃあ行こうか」

僕らは人気の少ない選手の待機室へと向かって歩き出した。

僕らが待機室へと向かう途中、美優と喋っていなければもう少し早く気づけたかもしれない。

うしろから、黒づくめの男がやってきて、スタンガンらしきものを押し付けようとしていたのが、僕の視界のはじっこに映った。

「つつ！」

蓮は、ギリギリでスタンガンをかわすと、男の手に手刀を叩きこみ、スタンガンを素早く奪う。そして奪ったスタンガンを男に押し付け、自分の後ろに向かって投げる。すると、その先に居た別の男が痺れて倒れる。美優の姿は、能力を使って隠れているらしく、どこにも見当たらない。

「美優さん、もう大丈夫そうですね」

「あ、ありがとうございます」

すつと、美優が能力を解除して現れるが、美優の後ろからものすごい速度で、ナイフを持っている女が斬りかかる。

「美優っ！」

蓮が、抱えるようにして美優をかばうと、次の瞬間に、蓮の背中から鮮血が飛び散った。

「つつ……」

「蓮!？」

ヤバいですね、深く斬られたみたいです。右肩から、左の腰にかけて。血がどくどくと流れ出ているのが分かります。

「詰めが甘いんだよ、ガキが」

女がもう一度斬ろうとナイフを振りかぶった瞬間、蓮の姿が消える。

「詰めが、甘いのは、そちらも同じですっ」

座標移動の能力を使い、女の後ろに回り込んだ蓮は、

「ライダーキック（笑）」

女の首筋に蹴りを叩きこんだ。

ナターシャ・ファイルス

「蓮、蓮。ねえ蓮ってば」

「はいはい……。何ですか、ねえ……？」

「よ、よかつたあ」

ふう、ちよつと血を失くしすぎたみたいですね。頭がくらくらしま
すよ……。でも、まだ意識を持つてられましたねえ。血がさ
つきから流れ続けているのでそろそろ限界は限界なんでしょうが。

「蓮、人呼んでくるから」

美優さんがどこかに行こうとしてますね。でも……

「まだ敵がいるかもしれないですね。別行動をとるのは危険です。僕も
あなたの能力、光学迷彩ステルスの効果対象に含めてください。僕の座標移
動トラントを短距離で連発させて移動をしましょう。そちらの方がお互いの
安全を確保できます」

「でも、その怪我で能力なんて使ったら……」

「あなたが一人だったら敵にばれたときに危険ですよ。っ痛……

……これでは、足手まといかもしれませんけどね……
はあ……」

これじゃまともには戦えませんね。美優さんの能力と組み合わせた
奇襲で相手を出し抜き、逃げるか一撃で意識を刈り取るしかないで
すね。

はあ、篠ノ之道場最強（仮）としての面目が立ちませんね。こんな
簡単に大怪我を負って、死にそうになるなんて……。道場の
看板に泥を塗ってしまいました。

「技術畑の人間なのに無茶しないで」

「確かにそうですね……その言い方はひどくありません
？」

「今は休んでて」

休んだら2度と立てない気もしますね。よくあるじゃないですか、

アニメとかでも傷ついた仲間のために助けを呼びに行ったら、戻って来た時に死んでいたとか、そういうパターン。

「ほら、美優さん行きますよっ、くう」

あはは、能力を使うまでもなく、立ちあがることすらできないようですね。こんなことならもっと早くからナノマシンの製造に励むべきでしたね。……！そうですね、何で気が付かなかつたんでしょう。

「美優さん、多分まだ使えると思うんですけど、僕のポケットの中に携帯電話が入っています。ラインに通信を入れてください。トランスフォーマー全機集合って、それとラインはここまで来るようにと……では後は任せ、まし、た、よ……」

ははは、ここまでしか意識は持ちそうにないですね……

「ちよっ、蓮！？目覚ましてよ。蓮！？」

「どうしたのかしら？」

「ん？ああ、確かに通路の方が騒がしいな。オリムラ・チフユが歩いていたら一般人がそこで待ち伏せしていたとかじゃねえか？」

「そうねえ、イーリ。でもなんか悲鳴っぽくない？」

織斑千冬の待機室ではなく、隣のナターシャ・ファイルスの待機室に居た、二人は声を聞き取っていた。

残念ながら、今、隣の織斑千冬の待機室には、誰もいない状態である。

「ナタル、あんま気にすることはねーぞ」

「……あのねえ、まあいいわ。ちよっと様子見てくるわね。」

ブリュンヒルデなら挨拶ぐらいして来なくっちゃ」

「んー行ってらっしゃい」

「はいはい」

部屋からは、ナターシャ・ファイルスが歩きだした。

はあ、出てきたはいいものの、ブリュンヒルデどこるか誰もいないわねえ。何かそんな気分よ。

「誰かいないのお」

思わず口からはそんな言葉がこぼれてしまう。

「……返事すらな」助けてくださいっ」……今聴こえたわ。助けてって、どうしたっていうのよ。

彼女が少し小走りで進んだ先で見たのは、血だらけでぐったりした少年と、パニックに陥りかけている少女だった。

ナターシャ・ファイルス（後書き）

そろそろISS学園に向かいます。
使えるのは、兄だけ！？

起きたらそこは……

「この子は？」

「織斑蓮です、私は藤原美優です」

「お、織斑！？何があつたのよ」

「変な人たちに襲われて、蓮が、蓮が私の身代わりに……」

「おっけ、大丈夫だいたい分かつたわ」

「本当はこの子を拉致なり何なりしてブリュンヒルデの決勝戦を邪魔する気だつたのね。……ちよつとまって、織斑つて三姉弟じゃ……」

「まずいわ、この子だけじゃなくて、お兄さんの方も襲われてるかもしれない」

「そんな、でも」

「でもそつちは取りあえず後よ、この子を医務室へ運ぶわ」
「ナターシャは自分のズボンのポケットへと手を運び、自分のポケットから携帯を取り出してイーリへ電話をかけながら、彼を背負い、医務室へと歩み出す。」

『で、どうだつた？ナタル。ブリュンヒルデ「イーリ、ふざけている場合じゃないわよ。いそいでブリュンヒルデを探して、彼女の弟が襲われて大怪我を負つたわ」……なんだと！』

「つかつかと小走りで、でも背中の中には衝撃が行かないようにしながら急ぐ。」

「弟の方は自力で撃退はしたみたいだけど、大怪我を負つたの。兄の方は音信不通。急いで探して」

『お、おう』

携帯をナターシャは閉じると、

「最初からこうすればよかつたわ……」

ISを展開して、美優と、蓮を抱える。

「え、あ、ちよつと待っ」

「しつかりつかまってなさい」
通路で出せる最大速度を出して、医務室へと駆け抜けた。

「この子は織斑蓮、ブリュンヒルデの弟よ、早く治療して」
「は、はい」

その数分後、医務室には、治療中のランプが点灯した。

「そうですね、第二回IIS世界大会は中止に……」
「ええ、あなたのお姉さんは誘拐されたお兄さんを助けに行ったわよ」

僕は怪我を負って、気を失っていたようです。で、まあ、ここは会場の医務室なんですが……

「ところでナターシャさん、何で美優は僕の膝枕で寝ているんですか？」

よだれは、垂らしていないんですが、僕の膝を枕に寝ているんですよねえ。

「いいじゃない、その子凄く泣きそうになってたの我慢していたのよ。で、まあたまたま通路に出てきた私に助けを求めてね」

「そう、ですか……」
心配掛けてしまったみたいですね。迷惑をかけるつもりはなかったんですが。

「ありがとうございます、美優さん」

僕は手をのばして、美優さんのあたまを撫でた。

「あらあら青春ね」

「なにがですか……」

こんな青春あつてたまりますか、変な組織に襲われる様な青春でも、問題が発覚しましたね。

転生してからさすがに月日が経ちすぎました。原作知識があやふやで、今回のことも忘れていましたからね……。今覚えていてのことと言えば、兄さんがISを動かせること、クラス対抗戦だか何だかで無人機が来ること。二人、転入生が来ること。海でISが暴走して、その時のパイロットが、えーと、ナ、ナタ何とか……。えーとアメリカの代表ですから？ ナターシャさん？ まあ後はレースがあつて、もう一回試合があるくらいでしたね。

「痛っ」

「まだ体はあまり動かさないほうがいいわ。傷口は閉じたけれど完壁に治ったわけじゃないのよ」

「そうですね……。何かとご迷惑をおかけしました」

「そんなことないわよ、それに子供はそういうことを気にしないほうがいいわよ」

「は、はあ……」

そんなもんなんですかね？

起きたらそこは・・・(後書き)

こっちは書きにくい・・・

ゼロ使の方がなぜか圧倒的に書きやすい・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4012w/>

僕達のIS 《インフィニット・ストラトス》

2011年10月28日23時33分発行